

共生社会は寛容の心から

上 廣 榮 治

一年前の六月末、イラクとシリアにまたがる地域で、イスラム教スンニ派の過激派が勝手に「イスラム国（IS）」の建国を宣言し、自分たちの「正義」を高らかに謳いあげ、世界中を敵に回して、残虐非道な行為を繰り返してきました。二人の日本人が犠牲になったのはご承知のとおりです。

二十世紀は「戦争の世紀」といわれ、おびただしい血と涙が流されました。そのため、二十一世紀こそは「平和の世紀」にしたいと誰もが願ったものでした。しかし、その夢は二〇〇一年九月十一日のアメリカ同時多発テロで早くも崩れ、アフガニスタン戦争、イラク戦争とつながる「テロと戦争の世紀」を迎えたのでした。世界の戦争マップを見ると、現在も中東やアフリカを中心に四十の国と地域で武力紛争が続いており、人類のおよそ三分の一が何らかの形で紛争に巻き込まれているといわれます。それは私たちが目指す共生社会や倫理社会とは真反対の姿です。

「人類の歴史は戦争の歴史だ」ともいわれますが、では戦争はなぜ起こるのでしょうか。

二千年にわたる歴史を調べ、『史記』を著した司馬遷は、その中で、「正義の戦争」などは一度もなく、すべての戦争はみな「利得」によるものだったと記しています。利得とは人間の「利己的な欲望」です。

一方がその利己的な欲望を満たそうとすれば、他方の不満が噴出し、争いに至るのは必然です。

また、いかなる戦争も常に「正義」が標榜ひょうぼうされますが、司馬遷もいうように、その正義は自分勝手な自分たちの「正義」に過ぎません。たとえ、どのような大義名分を掲げようとも、戦争は例外なく自分たちの利益を優先し、自分たちの民族や宗教や主義だけを主張して、他を認めない「自己中心的な欲望」が、暴力となつて表れたものでしかありません。

では、そのような戦争を避け、「共生」へと向かう道はあるのでしょうか。最初の一步が「小異を捨て」ることです。「自分たちの正義」という小異の旗を降ろすことです。小異を捨てるとは、「寛容」になるということでもあります。寛容とは、自分の立場や自分の考え方と異なる人の立場や考え方を認め、自分の立場や考え方を相手に強要しないことです。人はそれぞれ違うことを認めることです。

互いに寛容になつて、相手の存在をあるがままに受け容れれば、話し合うための土俵に上がることができます。寛容な心を持てば、民族が違おうと宗教が異なろうとも、違いは違いとして受け容れ、相手を理解し、互いの共通項を見出していくことができるはずです。なぜなら、大本のところでは、共に仕合わせを求める人間だからです。不寛容の行き着く先は戦争であり、平和は寛容の先にあるのです。

「小異を捨てて大同につく」という言葉で思い出すのは、中国の今は亡き周恩来首相のことです。一九七二年、中国と国交を回復するために時の首相田中角栄は中国を訪問しますが、日中戦争のしこりやイデオロギーの違いなど、大きな壁が立ちはだかつていました。しかし、そんななかで周恩来は「小異を捨てて大同につく」ことを決断し、無事に日中の国交が結ばれたのです。

周恩来は若い頃、日本に留学していました。その折、日本人の寛容さを垣間見たといひます。日本人は

たとえ喧嘩をしても、少し時間がたてば、「すんだことは水に流そう」と、肩を叩き合つて未来に向かうとする。そんな日本人の寛容な心に、周恩来は好感をもつたといふのです。

外交が戦争を避け、平和と協調を目指すものであるのなら、小異を言い立て相手を非難することが外交であるはずがありません。周恩来首相が示したように、小異を捨てて大同につくことこそが外交の要諦（ようてい）です。国と国にあつても、「人の悪をいわず」「愛和」をはかることは平和の基本なのです。

明治時代、日本の外交官が北欧のある国と通商の交渉をしていたときのことです。互いの主張には隔たりが大きく、なかなか話がまとまりません。何度目かの休憩時間に、日本の外交官が窓の外に降る雪を見て、ふと「私の国でも雪が降っているだろうな」とつぶやいたところ、相手は驚いて、「あなたの国でも雪が降るのか」と聞いたそうです。その外交官は北陸の出身で、雪が降るところか大変な豪雪地帯だと言ふと、相手は急に態度を変えて、「それなら日本は信頼にたる国に違いない」と言つたそうです。

その頃の北欧では、雪の降る国は信用できるが、降らない国は信用できないと考えられていたそうです。なぜなら、雪国の人間は、厳しい寒さに耐えながら互いに協力して勤勉に働かなければ生きてゆけない。それに比べて、気候に恵まれた南国の人は怠惰な人たちに違いないと、思い込んでいたからです。当時、日本はヨーロッパに比べると、ずいぶん南の国だと思われていたのです。

こうして、「日本でも雪が降る」というたつたひと言が相手のわだかまりを解き、互いの心に相手を受け容れる気持ちを生んで、交渉はとんとん拍子に運んだといふのです。

寛容とは、「寛く容れる」（ひろく）ことです。たとえ立場や考え方が異なる相手でも、違いをそのまま受け容れることです。あるがままの現実を大肯定することです。たとえ相手が不寛容であつても、寛容をもつて対

することで事態をより善く変えていくというのが、実践倫理の教えるところだ。

しかし昨今、近隣国との関係では、不寛容の風潮が目立ちます。テレビなどでは、自らを自画自賛する番組も増えています。「人の悪」を言つて、「己の善」を語っているのです。

では、寛容の心はどうすれば育つのでしょうか。家庭や学校の教育が果たす役割は大きいと思います。評論家の佐高信さたかのぶさんは、以前、新聞のコラムに「寝小便に学んだ寛容」という文章を寄せています。それによると、佐高さんは中学校に入学してもまだ寝小便が直らなかつたそうです。そんなある日、山形市で開催されるそろばんの県大会に出場することになります。佐高さんはじめ酒田市からの出場者は全員同じ旅館に泊まることになっていましたが、息子の寝小便を心配した両親の配慮で、佐高さんだけ、当時、山形大学の女子寮にいたお姉さんの部屋に泊まることに許されました。そのため、友だちに寝小便がバレる心配をせずにすみ、佐高さんは一年生ながら、三位に入賞したそうです。

その翌年もそろばんの県大会に出場しますが、頼みのお姉さんはすでに大学を卒業しており、他の出場者と同じ旅館に泊まらねばなりません。そのときの佐高さんは、もし寝小便をしてしまったら旅館の窓から飛び降りて死ぬしかないかとまで思いつめていたそうです。結局、その晩は一睡もできず、大会の成績も振るわなかつたということです。しかし、佐高さんのお母さんは、息子の寝小便を一度も叱ることなく、気長に見守ってくれたといいます。佐高さんは、人間の持つ弱さに対するお母さんのあたたかい眼差しから、人の過ちを許す「寛容の心」を学んだと記しています。

人は、「親の恩、師の恩、社会の恩」を思い、自分だけで生きていくのではないと自覚するとき、寛容になれるのです。